令和４年度
ＪＲ成田駅西口・赤坂センター地区整備調査特別委員会 行政視察報告書

１．視察日程

令和４年１０月１３日（木）～１０月１４日（金）

２．視察先・視察内容

(1) 愛知県安城市　『アンフォーレ』

・整備に当たり市民意見の把握について

・にぎわいの創出について

・整備後の効果について

(2) 愛知県豊橋市　『ｅｍＣＡＭＰＵＳ』

・整備に当たり市民意見の把握について

・にぎわいの創出について

・整備後の効果について

３．参 加 者

委 員 長　油田　　清

副委員長　小山　　昭

委　　員　眞野　義行　　荒川さくら　　会津　素子

荒木　　博　　大倉富重雄

４．視察の概要

◆　愛知県安城市　１０月１３日(木)　【視察施設：アンフォーレ】

施設概要

〇事業名称　中心市街地拠点整備事業

〇施設愛称　アンフォーレ

〇開　　館　平成２９年６月（２０１６年）

	公共施設（本館）	民間施設（南館）
事業手法	ＰＦＩ（ＢＴＯ方式）	事業用定期借地
構造	鉄骨造	鉄骨造
敷地面積	約７，９３２㎡	約４，３７３㎡
建築面積	約２，４０３㎡	約３，５９７㎡
延床面積	約９，１９３㎡	約９，０５７㎡

事業期間	２０１４年3月２４日から ２０３２年5月３１日まで	２０１６年6月　１日から ２０３７年5月３１日まで
契約事業者	安城情報拠点施設サービス株式会社 （清水建設、スターツＣＡＭ、 三上建築事務所）	安城民間収益サービス株式会社 （スターツアメニティ、清水建設）
	公共施設（本館）	**民間施設（南館）**
施　設　内　容		
４階	安城市図書情報館（学問と芸術）	―
３階	安城市図書情報館（暮らし）	―
２階	安城市図書情報館（子ども）	カルチャースクール
１階	交流多目的スペース 証明・旅券窓口センター カフェ 総合案内	スーパーマーケット
地下１階	ホール（可動式２５５席） 会議室（控室）	―
屋外施設	願いごと広場（イベント広場） 御幸公園	―

事業の経過

平成１４年　安城更生病院移転
平成１９年　中心市街地拠点整備構想策定懇話会の設置
平成２０年　基本構想の策定
平成２２年　基本計画の策定
平成２４年　事業計画の策定、中心市街地拠点施設フォーラムの開催
平成２５年　実施方針等説明会の開催、中心市街地拠点整備事業募集要項の公表
平成２６年　事業契約の締結
平成２７年　公共施設棟建設工事着工、愛称の公募、市民投票
平成２８年　愛称決定　『アンフォーレ』、
　　中心市街地拠点施設条例制定、事業用定期借地権設定契約の締結
平成２９年　所有権移転、供用開始

特　徴

○ ＰＦＩ事業（ＢＴＯ）

・安城情報拠点施設サービス株式会社（清水建設、三上建築事務所、スターツ）

・施設の設計と建設、１５年間の維持管理を行い、有料駐車場を含む商業施設棟は２０年間の定期借地事業契約としている。

○ 図書情報館（市直営）

・複合施設内の各施設との連携や学校図書館との連携、中心市街地拠点施設としての機能などが評価され、『Ｌｉｂｒａｒｙ ｏｆ ｔｈｅ Ｙｅａｒ ２０２０』において、オーディエンス賞と優秀賞を受賞。

・図書情報館内のビジネス支援センターでは、商工課職員とコーディネーターが常駐し、図書館司書のレファレンスと連携して就業支援をサポートしている。

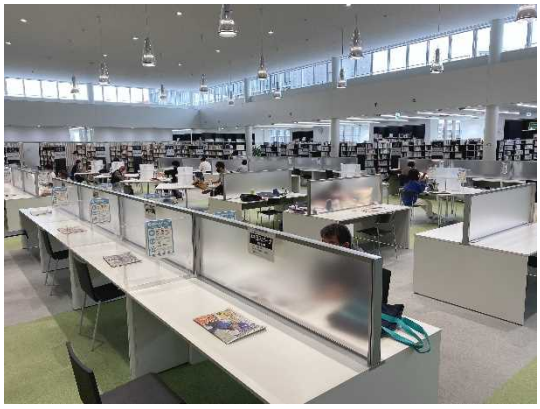
・図書情報館内には、予約制の学習席が約１００席と予約なしで利用できる閲覧兼学習スペースが広く設置され、持込学習を認めている（飲食可）。

・利用者の利便性向上などを図るため、予約した本を２４時間受取ることができる「予約本受取機」や、借りた本のタイトルや金額を記帳できる「読書通帳機」を設置。

○ 願いごと広場、本館エントランス

・願いごと広場は、市民の休憩スペースとして利用するほか、にぎわい創出の場として、企業や市民団体の各種イベントを開催している。

・本館エントランスは、フリースペースとしての利用のほか、作品展のギャラリーとしての利用やワークショップなどのイベントを開催しており、使用料が、半日あたり１０円／㎡という設定ということもあり、稼働率は１００％。



【 質　疑 】

問　「アンフォーレ」という愛称は、市民公募しているが、その期間と応募数は。

答　募集期間は、平成２７年７月１日から８月１７日までであり、応募数は３，６９２件である。

問　図書情報館の蔵書数は。

答　８４４，１５２冊である。（令和３年度）

※成田市立図書館（本館）５５０，０００冊

問　図書情報館内の閲覧や学習スペースなどの席数は。

答　館全体で５６６席あるが、現在はコロナ対応の間引きで、２５３席となっている。

問　「読書通帳機」とは、どういった機能や目的で設置されているのか。

答　銀行の通帳のように、借りた本の貸出日やタイトル、本の定価が記帳されるもの。市内の金融機関と協定を結んでおり、通帳を提供してもらっている。市内の中学生までは無料で発行しており、利用者の読書意欲を向上させる目的がある。

問　旧中央図書館を移転し図書情報館を開館した際、移転中の休館日の期間は。

答　中央図書館としては４カ月休館していたが、市内の公民館などに図書館分館（１２館）があるため、市民への図書の貸出は継続して行っていた。

問　旧中央図書館を移転に際し、どのくらい移転費用がかかったのか。

答　「図書情報館図書等背ラベル貼付及び移転業務」として、図書等背ラベル貼付、図書等の移動・配架、什器備品等及び事務室内資料の移動・設置の業務を、図書館流通センターに委託し、４９，４６４，０００円であった。

問　図書情報館スタッフ（会計年度任用職員）のうち、司書資格者数は。

答　全スタッフ６６名のうち、司書資格者数は３５名である。

問　エントランスの稼働率が１００％とのことだが、どのような利用が多いのか。

答　市内で活動しているサークルの展示会や焼き菓子や工芸品の販売等が多い。また、毎月第２土曜日の図書情報館が閉館後には、その季節などに合わせた歌や演奏を届ける「アンフォーレエントランスライブ」を開催している。

【 委員所感 】

◈ 小山　　昭　副委員長 ◈

安城市では、アンフォーレの整備に当たり、フォーラムを２回（延べ３９６名参加）、説明会を市内４箇所（延べ２６３名参加）で開催し、パブリックコメントを２回実施するなど、市民の意見・要望を聴く機会を多く設けたとのことであった。施設を視察すると、まさにその意見などが反映されたであろう、市民が利用しやすい施設であった。

例えば、１階の本館エントランスは、貸しスペースとなっており、市内で活動する団体などのイベントやギャラリー、物販などを行うことができ、その利用料は１㎡あたり１０円という安価で設定されていることから、その稼働率は１００％とのことであった。また、エントランス近くには、休憩スペースとカフェが配置され、視察時にも飲物を飲みながら休憩されている方が多く見られた。そして、地下にあるホールからつながる１階のホールロビーは、施設の外にあるイベント広場「願いごと広場」と一体的に利用することができ、利用者の動線や使いやすさに配慮された配置となっていた。

２階から４階の「図書情報館」は、子どものフロア・暮らしのフロア・学問と芸術のフロアといった、フロアごとにテーマが設けられており、利用者の会話や飲食を制限していないため、従来の静かな図書館のイメージとは異なり、雰囲気としてはコミュニティセンターのような印象を受けた。また、どのフロアにも閲覧スペースが多く、特に４階は学習・閲覧スペースや半個室の学習エリア、グループで話し合いができるスペースも多く配置されていた。アンフォーレは、計画の段階から市民の声を聴いたことで、市民の憩いの場所、市民の学習機会や様々な活動を支える拠点施設となっていることが、視察を通して実感することができた。

成田市においては、赤坂センター地区複合施設整備事業が計画されているが、市民の声を多く聴き、様々な拠点施設となることが望まれる。今回の視察を参考に、事業の進捗を注視していきたい。

◈ 荒川　さくら　委員 ◈

アンフォーレは、安城市が事業者をプロポーザルで公募し、公共部分と民間部分を事業者が一体的に整備した。本館（公共施設部分）は事業者が建物を建て、市が買い取るというＰＦＩのＢＴＯ方式で整備し、１５年の維持管理業務を含め、総事業費６２億円とのことだった。

民間施設部分は、事業者に定期借地契約で土地を貸している。民間部分には駐車場とスーパーなどの民間が所有し管理する建物があり、２０年後には、更地返却と駐車場の市への無償譲渡される契約となっている。

本館の２階から４階は市立図書館で、２階の子どものフロアには新美南吉ゆかりの地という縁から、関連するかわいい像（置物）が各所に配置されている。３階にはビジネス支援センターもあり、有料のディスカッションルーム、各種プリンターが整備されていた。４階の中央にはたくさんの机と椅子が配置され、個別の学習ルームが３２室用意されており、無料で使用できる。全体的に窓が多く、中央の吹き抜けや天井の高さなど開放感があり、椅子やテーブルが多い為、好きなところで、いつでも本を読むことができる。

１階は、カフェやエントランスが貸しスペースとなっていて、１㎡あたり１０円で気軽に借りることができ、利用も多く、稼働率１００％とのことだった。

図書館の開館時間は平日９時から２０時、休日９時から１８時とのことだが、施設の外には、２４時間受け取り可能な予約本受け取り機が設置されていた。

１階部分の貸しスペースについては、成田市でもニーズがあると感じた。低価格で個人でも借りることができれば、市民の活動の場、交流の場として大いに役割を発揮できると考える。

図書館については、学習室や椅子やテーブルの配置、開館時間や２４時間の予約本受け取りなど、学ぶべき点が多いと感じた。成田市の図書館は司書や蔵書数では充実していることから、より多くの世代が利用でき、利用したいと思う図書館の改修や運用ができれば、更に発展していく事ができると思う。

一方、施設の点については、ＰＦＩにより、１５年間は維持管理業務を1億円／年で事業者にお願いしているが、その後の維持管理業務が未定とのことである。民間部分の２０年後の更地返却（更新も認められていない）については、環境面でも好ましいものではないため、市有地の特定の事業者への貸し出しという問題点に配慮しながらも、解決していく必要があると感じた。

なお、ＪＲ成田駅西口については、同様の定期借地契約（５０年）で行うため、今後の進め方を注視し、参考にしたい。

◈ 荒木　　博　委員 ◈

一言でいえば、素晴らしい発想の中心市街地拠点施設であると感じた。アンフォーレの特徴は、駅から徒歩５分で図書情報館やホール、駐車場やスーパーマーケットなどの商業施設となっており、「学び・健やか・交わりの場」として地域文化の創出と交流を生み出すとともに、中心市街地の活性化を目指している。

一般的に、図書館内での飲食や雑談は、他の利用者に迷惑になるため禁止されている図書館が多いが、アンフォーレは、施設空間構成も踏まえて、図書情報館は、ある程度賑やかな施設として位置づけ、多少の会話や飲食は容認することとなってい　る。

施設概要は、地下１階から１階までは、交流多目的スペースとして、２５５席の可動椅子が設置されたホールをはじめ、多目的室、エントランス、総合案内所、証明・旅券窓口センター、カフェ、願いごと広場などからなっており、エントランスの一部を、展示会・作品展・物品販売の会場として利用でき、利用料金は１㎡あたり１０円となっている。また、１階には不要になった本を有効活用するため、自由に持ち帰ることができるコーナーが設置されていた。

２階から４階までは「図書情報館」で、２階は子どもフロアで、赤ちゃんから小学生向けのほか、大人向けの子育ての本もあり、周りに気を使わなくても親子や友達同士でも楽しめるように工夫がされていた。２階の館外にある予約本受け取りコーナーでは、２４時間受け取りが可能となっていたほか、子どもたちが楽しみながら本への愛着をＵＰさせる読書通帳機やブックシャワーがあり、また各階には電子情報、自動貸出機、蔵書検索機などを設置されていた。

３階は、暮らしのフロアで話題の本をはじめ各分野の入門書、グループ学習室、ディスカッションルーム、健康支援室・講座室、ビジネス支援センター、スタジオ等があり、４階は学問と芸術のフロアとなっていた。

複合施設内における各施設との連携や学校図書室との連携、中心市街地拠点施設としての機能等が評価され『Ｌｉｂｒａｒｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｙｅａｒ　２０２０』において、オーディエンス賞と優秀賞を受賞されました。

現在、成田市で計画されている赤坂センター地区複合施設整備事業に向けて、図書情報館の取り組みや施設全体のコンセプトなど参考になるものと考えることから、当該事業の進捗に注目していきたい。

◆　愛知県豊橋市　１０月１４日(金)　【視察施設：ｅｍＣＡＭＰＵＳ（エムキャンパス)】

施設概要

〇事業名称　豊橋駅前大通二丁目地区市街地再開発事業

〇施設愛称　ｅｍＣＡＭＰＵＳ（エムキャンパス）

〇開　　館　ｅｍＣＡＭＰＵＳ EAST（東棟）　２０２１年１１月

※WEST（西棟）　建設中（２０２４年９月竣工予定）

	ｅｍＣＡＭＰＵＳ EAST（東棟）
構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
敷地面積	約５，０１４㎡
建築面積	約３，９８４㎡
延床面積	約３３，４０５㎡
施行者	豊橋駅前大通二丁目地区市街地再開発組合
施　設　内　容	
ｅｍＣＡＭＰＵＳ　ＥＡＳＴ（東棟）	
６階-２４階	住戸（１２９戸）
屋上（低層部）	屋上農園
５階	ｅｍＣＡＭＰＵＳ　ＳＴＵＤＩＯ ／ オフィス（4 社）
４階	豊橋市駅前窓口センター、旅券センター ／ オフィス（10 社）
３階	豊橋市まちなか図書館
２階	豊橋市まちなか図書館 豊橋市国際交流協会
１階	ｅｍＣＡＭＰＵＳ　ＦＯＯＤ
屋外施設	豊橋市まちなか広場（イベント広場）

事業の経過

平成２２年　豊橋駅前大通二丁目地区再開発準備組合の設立

平成２３年　基本計画の策定

平成２４年　推進計画の策定

平成２５年　第二期豊橋市中心市街地活性化基本計画 実施事業に位置付け

平成２６年　第一種市街地再開発事業の都市計画決定

平成２７年　基本設計、権利者協議市街地再開発組合設立

平成２８年　実施設計、権利変換計画の作成

平成３０年　東棟新築工事着工

令和　２年　施設名称及びロゴ発表
令和　３年　東棟竣工
　　７月　駅前窓口センター、旅券センター 業務開始
　　１０月　まちなか広場オープン
　　１１月　グランドオープン（まちなか図書館他業務開始）

特　徴

○ 事業費

「豊橋駅前大通二丁目地区第一種市街地再開発事業」
：約２２９億円（国・県・市（約９８億円））　　※社会資本整備総合交付金
「まちなか図書館」
：約３５億円（保留床購入費 約２１億円、設計・内装・書架等 約１４億円）

○ コンセプト「豊橋市の情報発信基地」

・駅前大通りに面する敷地の中央には、各種イベントなどが開催される「まちなか広場」を配置し、まちなか広場に面した１階には、東三河を中心とした豊かな食材を買って食べて楽しむことができる「ｅｍＣＡＭＰＵＳ ＦＯＯＤ」を配置。２、３階には、出会いと交流を生み、新しいコミュニティを育む図書館として「まちなか図書館」を配置している。

○ 豊橋市まちなか図書館（市直営 ※窓口業務は委託）

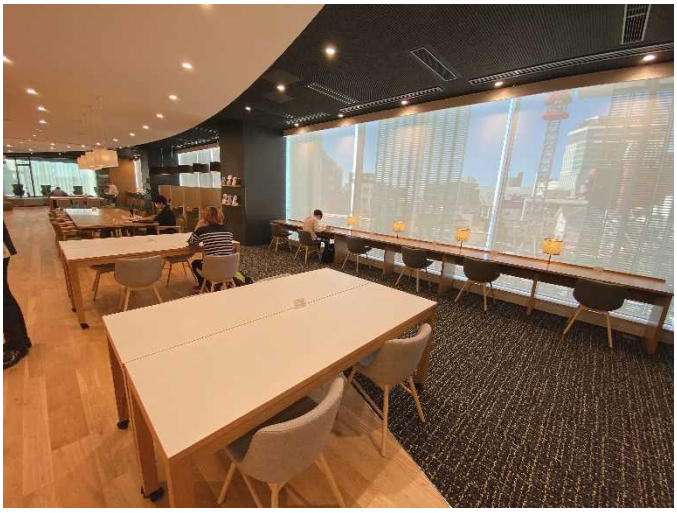
・新たな知見や人的ネットワークを図書館に注入するため、企画力・行動力・プロモーション能力に長けた人材を発掘するため、初代館長を全国公募。元ＮＨＫディレクターの種田 澪 氏が初代館長に就任。
・蔵書はすべて開架で約６万冊。大型書店を参考に「料理」や「アート」といったテーマ別に配列。２階と３階をつなぐ階段（中央ステップ）は、座席としても利用することができ、イベントの際に使用している。
・館内では原則、飲食や会話が自由にすることができ、カフェも併設している。静かに読書したい人向けの予約制のラウンジや、読み聞かせができるキッズスペースなども充実している。

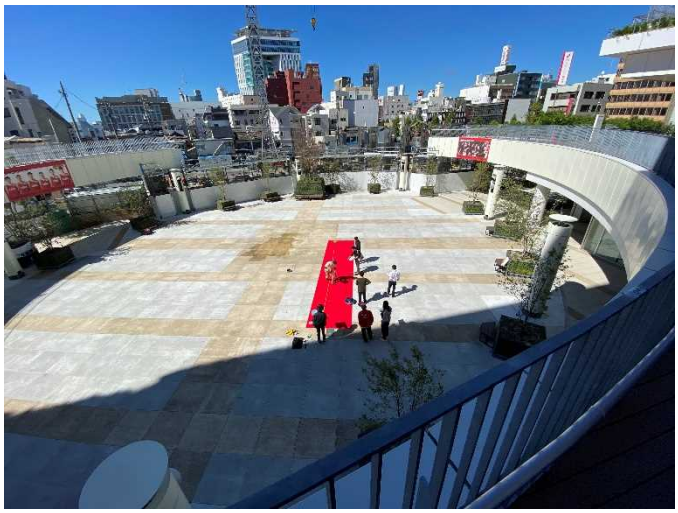
○ 豊橋市まちなか広場（市管理）

・まちなかの新たなにぎわい創出拠点として、様々な用途で使用できる「多目的空間」と、憩いやくつろぎが得られる「みどりの空間」がある。
・「多目的空間」では、音楽イベントやフリーマーケットなどの開催、「みどりの空間」では、読書や昼食など、利用者それぞれの楽しみ方で過ごせる広場。

○ ｅｍＣＡＭＰＵＳ ＦＯＯＤ

・東三河食の発信拠点として、フードホール、レストラン、マーケットの３つのゾーンに分かれており、東三河の食を盛り上げるフードクリエイターとのコラボイベントなどを開催している。





【 質　疑 】

まちなか図書館について

問　図書館のコンセプトを決めるに当たり、何度もワークショップを開催しているが、年代のターゲットを絞って開催したのか。

答　年齢の条件は設定せずに公募した。結果的に、幅広い年齢層の参加があり多くの意見を把握することができた。

問　市民とのワークショップにおいて、どのような意見があったのか。（実現したものは）

答　図書館のルールや利用方法について、例えば館内での会話や飲食に関することや、図書の貸出だけではなく、市民の活動（工作や動画編集）や交流場所が欲しいといった意見があり、採用されている。

問　イベント情報のチラシに､｢対談 館長がいま会いたいひと｣というイベントがあるが、どんな内容のイベントを開催しているのか。

答　月に１回、純粋に私（館長）が会いたい人にお願いして来てもらって対談するのを聞いてもらうイベント。豊橋という地域にこんな人が居るということを、みなさんに知ってもらう機会や交流のきっかけとなればと思い、企画している。

問　図書館長を公募とした市のねらいは。

答　図書館を通して人とのつながりやにぎわいの創出につながる企画力を求めて、今までにない図書館を創るということを目的に公募とした。

問　行政や図書館勤務の経験がない中、館長になって感じることや手応えは。

答　（館長）元々地方転勤が多い前職であったため、地方の図書館をよく利用していたことから、個人的に図書館の理想像があった。経験がないからこそ自由な発想で意見することができ、他のスタッフから行政の視点でのフォローをもらいながら連携できている。

問　図書館スタッフの服装が、上が白いシャツで下が黒いパンツだが、制服があるのか。

答　誰がスタッフなのかをかわかりやすくするために、ドレスコードとして、色を統一している。職員の異動もあるので、制服をつくることはしなかった。

問　２階に配置されているインターナショナルスペースは、どのような活用がされているのか。

答　同じフロアに国際交流協会があるので、日本語教室の開催や会議のほか、市民に貸出を行っている。

問　豊橋市には外国の方の住民も多いと思うが、利用状況は。

答　統計はないが、他の図書館より外国の方の利用が多い印象がある。同じフロアにある国際交流協会と連携して友好都市の方とオンラインで交流会を開催や、愛知大学に通う留学生との交流会などを開催している。また、開館当初は、外国語の図書は少なかったが、問合せが多かったため、取扱いを増やして対応している。

問　市が再開発事業者から床を購入した形だが、他の所有者との共有部分や全体の修繕などに係る費用の負担はどのようになっているのか。

答　マンションなどの考え方と同様に区分所有になっていることから、管理組合に対して

定期的に修繕積立金を支払っている。

まちなか広場について

問　居住エリアの中にイベントスペース（まちなか広場）があるが、音（カラオケやイベントＢＧＭ）などの制限は。

答　音については、開館前から神経を使った部分である。にぎわいの創出を目的とした施設だが、迷惑施設となっては意味がないので、主催者と協議しながら手探りというのが実情である。運用としては、音響の使用は午後５時までとしている。

問　どのようなイベントが開催されているのか。

答　フリーマーケットやキッチンカーが集まってのイベントで利用されている。また、音楽イベントの利用もあるが、それらの複合イベントが多い。

【 委員所感 】

◈ 眞野　義行　委員 ◈

豊橋駅前から続く、駅前大通り地区の全体をつなげる視点を持って整備された地上２４階建ての ｅｍＣＡＭＰＵＳ ＥＡＳＴ。昨年１１月にオープンした、官民一体で開発を行なったその敷地内には、面積約９１０㎡の「まちなか広場」があり、「まち歩きの核となる緑にあふれたオアシス空間」として、多目的に活用できる憩いの場となっている。

ｅｍＣＡＭＰＵＳ ＥＡＳＴは、１階はピザ・和食・洋食・カフェ＆スイーツの全４つのジャンルからなるフードホール、地元東三河を中心に、全国、世界の美味しいが凝縮されたマーケットである。

２・３階は、本や情報といった従来の図書館機能を活用しつつ、市民同士の交流や、創造的な活動を支援する「まちなか図書館」がある。市内４つ目の図書館として中央図書館の分館として誕生。同じく２階の図書館の隣に開設されている豊橋市国際交流協会。まさに多文化共生を意識した人の交流を図っている。

５階は、地元の豊橋技術大学のサテライトオフィス、時事通信社などの民間会社及び、「ｅｍＣＡＭＰＵＳ ＳＴＵＤＩＯ」という会議室やリラックススペースの貸出しを行なう民間会社。そして、６階から２４階まではマンションとなっている。

特に印象に残った施設は「まちなか図書館」であった。館長に就任されたのは、応募者約６０名の中から選ばれた種田澪（おいだみお）さん。二児のママ。２０１４年にＮＨＫに入局し、東日本大震災の番組など数多く制作。その後、東京にてディレクターとしてドキュメンタリー番組を担当という経歴を持ち、今回館長の就任に合わせて、家族で豊橋市に移住されている。

館長は、「本や人と出会い新たな世界を創造する」「まちと繋がりまちづくりに貢献する」「誰もが気軽に立ち寄り、賑わいを生み出す」という３つのポリシーのもと、本を借りる、調べものをする場所というイメージが強い従来型の図書館のイメージを変え、これまでにない自由な発想で「そこに行ったら何か面白いことがあるかも！」と、今まで図書館を利用していなかった人も立ち寄りやすい場所することを目標としている。

成田市も「にぎわい創生」というテーマのもと、ＪＲ成田駅東口再開発に続き、ＪＲ成田駅西口市有地活用推進事業に着手したが、一体どういったにぎわいあふれる街を作りたいのか、そのコンセプトが見えてこない。この後、図書館や中央公民館を含めた赤坂地区複合施設整備事業も控えているが、私は、成田市が「国際都市」という冠をつけているのだから、国際的なにぎわい創生という視点に立って街づくりを考えるべきであると思う。

「官民一体」を理想にしている自治体と、現実にしている自治体との差は大きい。若い柔軟な発想や民間の手法を取り入れることが、新しい時代の流れを作るということを改めて感じさせられた視察であった。

◈ 会津　素子　委員 ◈

まちなか図書館は、公募によって選ばれた元ＮＨＫディレクターの女性が館長を務め、これまでにない図書館をつくり出していた。特に参考になった点は、館内で飲食を可としており、フロアの中心にカフェが設置されている。図書館の内装もまるでカフェのようであり、美味しいコーヒーを飲みながらゆっくり読書を楽しむことができる。

まず、館内での会話も可能であるため、成田市の中央図書館のように、静かに張り詰めた空気ではなく、お互いに勉強を教え合うこともできる温かい空気が流れていた。また、２階と３階を繋ぐ階段が、トークイベントや上映会時には客席に変身するという、館長が力を入れている「図書館で人と人とのつながりをつくる」ためのスペースが、館内のあちこちに設けられており、ワークショップや勉強会が開催できるようになっていた。

従来の十進分類法ではなく、テーマごとに配架しており、「僕らが旅に出る理由」（旅と地図コーナー)、「自然と遊ぼう」（アウトドアコーナー)、など、魅力的なテーマ名で紹介されていた。また、近隣の劇場と連携し、公演中の演劇の戯曲を展示し、記念イベントを開催するなど、市民のアートへの関心を高める機会をつくっており、図書館入り口の近くには国際交流協会が設置されており、留学生による外国語絵本の読み聞かせや、日本語教室など、国際交流協会と連携して開催しているとのことであった。成田市では、図書館の存在を知らない外国籍住民も多いため、このような連携はぜひ進めてほしいと感じた。

成田市の図書館も素晴らしいが、工夫次第でさらに魅力が増し、活字離れ・図書館離れした若者も惹きつけるのではないだろうか。

外に設置されている「まちなか広場」では、音楽イベントやマーケットなどのイベントが開催されている。視察当日も、翌日から始まるイベントの準備が行われていた。マンションが同施設の上階にあるため、音に関する苦情もあるようだが、人や音楽が行き交う場所は必要であると感じる。まちなか図書館と３年後に完成する西棟の建物と併せて、新しい交流拠点になることを願う。

◈ 大倉　富重雄　委員 ◈

豊橋市のｅｍＣＡＭＰＵＳを視察した。

中核市である豊橋市は、中心市街地である豊橋駅の付近に行政施設や文京施設、商店街があり、市民生活を支えるエリアとなっていた。しかし、大型商業施設の相次ぐ撤退により中心市街地の衰退がみられたことから中心市街地の都市機能の向上をめざし、中心市街地活性化基本計画を策定し駅前区画整理や再開発事業を進め都市機能の向上を図った。

コンセプトは、「あなたの笑むが満ちるキャンパス」食・健康・学びを楽しみ、つながる、笑む（ｅｍ）に満ちたキャンパスを目指した施設である。

１階には、カラダにも地球にも美味しい東三河の食の発信拠点として「次世代フードクリエイターの人材の発掘と育成を支援し、フードクリエイターの聖地としてのブランド構築と持続可能な地域社会を実現する」をめざしている。出入りが自由なオープンスペースは、食を通じて、人とつながる雰囲気に満ちていた。

２階と３階には、知と交流の創造拠点「豊橋市まちなか図書館」が設置され、気軽に立ち寄れ、市民が主体となって活動する新しいスタイルの図書館となった。豊橋市立図書館開館１１０周年を迎えた本年、「まちなか図書館」を設置して市内４館体制が整い、目指すべき図書館像が確立することになった。図書館の基本的な機能だけでなく、訪れた人同士の交流が生まれ、そこから新しいコミュニティや活動が生まれるような施設になることを目指している。新たな知見や人的ネットワークを図書館に注入するため、企画力、行動力、プロモーション能力に長けた人材を発掘するため、初代館長を全国公募し、元ＮＨＫディレクターの種田澪氏が就任した。こうした期待に応える成果を上げていた。職員はインカムを各自持ち即時連携できる体制になっており、それぞれの取り組みをみても市民目線の柔軟な発想が取り入れられていることが目立っていた。例えば、館内は原則、飲食や会話が自由にすることができ、カフェも併設され、静かに読書をしたい人向けの予約制のラウンジや読み聞かせができるキッズスペースなども充実していた。図書の配列は、大型店を参考に「料理」などといったテーマ別に工夫されていた。開館後一年も経たないのに来館者数は、５１万人を超えており、これは、豊橋市の中央図書館など３館合わせての来館者数に迫る数であり、いかに評価されているかを物語っている。当初の公園構想から図書館に変更されたのも結果として理解できる。

成田市の今後の図書館のあり方を考えると、図書館像という目標を明確にして、時代に応える図書館を目指す必要があると感じた。今までの既成概念を打ち破って取組むことが大事であるとも思った。

同じ２階には、国際交流協会が設置され、「まちなか図書館」「ｅｍＣＡＭＰＵＳ　ＦＯＯＤ」「ｅｍＣＡＭＰＵＳ　ＳＴＵＤＩＯ」と連携して、地域に根ざした国際課の事業（外国人総合相談窓口、外国語の絵本の読み聞かせ、食を味わう海外提携都市めぐりなど）の取り組みをしている。多様化が求められていることから、国際交流協会とまちなか図書館が同じフロアに併設されていることも、連携を視野にいれて、よく考えられていると思った。

４階には、オフィス１０社と開発ビルに入っていた行政サービス窓口（豊橋市駅前窓口センター、旅券センター）が設置されていた。５階の「ｅｍＣＡＭＰＵＳ　ＳＴＵＤＩＯ」のコ

ンセプトは「共創」で「まなび」を通して新しい「価値」や「ワクワク」を創出するプログラム（企業研修、生涯教育、事業創造）の３つを核として、「出会い」を通し、ワクワクを育てる「学びプログラム」「チャレンジ支援」「貸会議室」として展開していた。民間会社の方から丁寧な説明を頂き名刺を頂いた。この名刺には、このキャッチコピーが書かれ、ＱＲコードで取り組みがわかりやすいものとなっていた。また、起業家にとって貸事務所は魅力的なものではないかと思った。

敷地の中央広場には、まちなかの新たなにぎわい創出拠点「豊橋市まちなか広場」が設置され、様々な用途で使用できる「多目的空間」と憩いやくつろぎが得られる「みどりの空間」がある。以前「狭間児童広場」があったことから、枝垂れ桜を接木としてケヤキの木をベンチに、また地域の人々の思いの詰まった二宮金次郎像もこの広場に移設するなど、まちの記憶をつなぐように整備されていた。

６階には、屋上農園が設置されていた。施設整備にあたっては、環境に配慮した取り組みもかかせないとも思った。

このようにｅｍＣＡＭＰＵＳ全体での取り組みや連携が図られており、多種多様なコンテンツを持った来館者を迎え、施設全体で共通のテーマを持って連携のイベントを開催していた。こうした取り組みを成田市でも参考にしたい。

【 委員長所感 】

「これまでの概念を変えるものだった」というのが　この視察の一番の感想である。

１日目に視察した「アンフォーレ」は、安城駅に近接する中心市街地拠点施設として、また２日目に視察した「ｅｍＣＡＭＰＵＳ」も豊橋駅前の「にぎわいの交流空間を形成する街づくりの推進」として位置づけられている。そして、その中心に図書館があることが共通していた。両図書館に共通するのは、複合施設の中に設置され、街を活性化する、人が集まる施設として位置づけられていることである。静かな本好きの人が集まるというイメージがある図書館とにぎわいが融合しているのは画期的なことだと感じた。

「アンフォーレ」の本館エントランスは、フリースペースとして１㎡１０円/時間という低料金で貸し出されており、占いや手作り商品の販売など市民に自由に利用されていた。願い事広場も、市民の休憩スペースや、各種のイベントの会場として使用されていた。図書館は２階から４階に分かれ、２階は子どもフロア、３階が暮らしののフロア、４階は学問と芸術のフロアになっている。現在は、新型コロナ対策で制限されているが、ペットボトルなど蓋がしっかりしていれば、飲食が自由になっていた。１階には、フリースペースでお店が出ており、２階の子どもフロアと合わせ、図書館の持つ重たい静まりはない。平日は、２０時まで利用でき、令和３年度の利用者は、１０代と２０代で９％、３０代で１８％、４０代で２５％と比較的若い利用者が多いのも特徴的であった。個人やグループで学習できるスペースの確保もされており、静かに本を楽しむ人々の保障もされていた。新型コロナウイルス下での変化もありそうだが、今後の図書館の可能性を広げるものであった。

施設の中には民間施設としてスーパーマーケットがあったが、やはり駐車場が併設されていた。（一定時間無料）ＪＲ成田駅西口にも、スーパーマーケットが入るが駐車場がないことが懸念される。

２日目に視察した「ｅｍＣＡＭＰＵＳ」は、６階から２４階がマンションとなっており、まちなか図書館は２階から３階に設置されている。同じフロアには国際交流協会も入っていた。前日に視察した図書館と同様に２階にはカフェがあり、サンドイッチなど軽食もあり、当然、この階において飲食自由となっていた。

「本の閲覧や貸し出しといった基本的な機能に加え、訪れた人同士の交流が生まれ、そこから新しいコミュニティや活動が生まれるような施設となることを」目指していて、図書館に来るきっかけを作ることも合わせ、様々なイベントが開催されていた。例えば、１０月には「ぷらっとおしゃべり『高校性と創る演劇』に迫る」や「対談 館長が今会いたい人」、「愛知大学オープンカレッジ」のほか、各図書の配置によってインターナショナルスペースやアートペース、ワークショップスペースなどがあり、そのスペースでも「現地スタッフと話そう中国・南通市の最新情報」などが企画されていた。市内の企業や大学とも連携している。

こうした企画を支えているのは、全国から公募で選ばれた元ＮＨＫの番組ディレクターという女性の図書館長。本館の館長は別にいるため、まちなか図書館に特化して業務を担っており、蔵書数（全て開架）は１０６，０００冊と決して大きな図書館ではないが、賑わいを確実に作り出していた。

令和５年度には整備の基本的なビジョンが示される赤坂複合施設整備事業には、入居から５０年がたち、名前だけのニュータウンから、にぎわいを取り戻せる起爆剤となるような図書館を併せ持った施設を造っていかなければならないことを強く感じた視察になりました。

ＪＲ成田駅西口・赤坂センター地区整備調査特別委員会
委員長　油田　　清